

あるかを見渡すと以上のようになると思います。そこでは、覚醒や意識性があるかなしかの二者択一的な議論がされています。この発想が決定的に間違っているとは思いません。こうした機能低下の程度は連続的なはずです。この窮極の低下状態の一群に対し、その境界を定めて脳死とするのは妥当でしょう。しかし、脳死の基準(人為的基準ですが)に合致しない多くの重度脳機能障害がその周辺に存在します。そして、その内的世界の理解は極めて不十分です。私たちは、その内的世界を知るために努めねばならないと考えます。

夏期デイを終えて

大石 愛

私は今年の夏初めて、スタッフとして夏期デイを担当しました。学生のころに一度だけアルバイトとして参加したことはあったのですが、久しぶりの夏期デイということもあり、スタッフとして私でち

んと役目が務まるのだろうか」という不安でいっぱいでした。

夏期デイには様々な障害像の方が通っています。一グループあたり一日七〜八名ずつ参加し、グループ毎に午前・午後と活動をしていました。様々な障害像の方が集まるなかで「みんなで楽しむことができ活動はなんだろう」「この活動内容で、この利用者が楽しむためにはどうすればよいのだろう」と日々考え、アルバイトならではの視点や意見を出してもらい、一緒に活動内容を決めていきました。そのなかで今年は夏祭りを企画し、「少しでも夏の雰囲気を感じてもらおう」ということになりました。夏祭りでは利用者にも甚平などの普段とはちよっと違う服装をしてきてもらいました。ヨーヨーつりや新聞紙とセロハンで作った金魚すくいを体験し、最後にみんなで盆踊りの曲に合わせて体を動かしたり、和太鼓を叩いたりしました。

夏祭りの準備などで物品が届かなくて準備がギリギリになってしまったり、スタッフの意見がまとまらなかったり：と大変なことも多かったです。活動をしていくなかで見ることのできる利用者の笑顔

や保護者の方からの「週二回のこの時間が貴重」「夏期デイの日は表情がいい」などの言葉がとても励みになりました。

また夏期デイに参加することで、初心に戻ることができたような気がします。私は学生の頃、夏期デイでの経験を通して「利用者の笑顔につながるような関わりをしたい」と思い、利用者それぞれに合う関わりを見つける姿勢に感動して、おそぞらでの就職を希望しました。「なぜおそぞらで働きたいと思ったのか」「就職したらどんなことをしたいと思っていたのか」を思い出すことができた夏になりました。

(あすか 看護師)



介護員研修に参加して

古瀬 亜美

すごく緊張した一日でした。

介護員研修は、他のゾーンの先輩達と一緒にということに緊張していました。しかし、最初に行ったアイスブレイキングで、少し緊張がとけました。アイコンタクトのみでコミュニケーションをとり、誕生日の順に並ぶというゲームをしました。一緒に仕事をしている先輩でもアイコンタクトのみのコミュニケーションはとったことがなく、見つめ合うのがすごく恥ずかしかったです。でも、行前よりも初対面の先輩との距離が近づいた気がしました。研修の中で最も緊張したのがレポート発表でした。自分が発表するのは恥ずかしくて嫌だなと思っていましたが、たくさんの方の発表を聞いてとても勉強になりました。

私が普段何気なく行っていた「声掛け」も、自分とは違った視点でみている人がいることに気が付きました。その中

で、私はケアを行った後の声掛けを意識しようと思いましたが、ケアをする前に「○します。」と声掛けはしていましたが、終わった後に「終わりましたよ」と一言声掛けすることで、利用者は安心できるのではないかと考えました。そして、これからのケアの参考にしようと思えました。

午後のグループの討議では、少人数になったことで、三ヶ月間仕事をしてきた中で不安に感じていたことや疑問に思っていたことを発言することができました。その発言に対し先輩に意見やアドバイスももらうことができ、「周りも見えて仕事をする」という目標もできました。

最後の手紙交換では、先輩に「ここがよかった」などと具体的に褒めていただきました。仕事を始めてから、自分の意見に自信がありませんでしたが、褒めてもらうことで少しでも自信が持てた気がしました。

(すばる 介護職員)

